

Title	創造の持続、はじまりの偏在
Author(s)	平光, 哲郎
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 39 P.1-P.19
Issue Date	2005-12
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/6237
DOI	
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

創造の持続、はじまりの遍在

平 光 哲 朗

ex nihilo

「ベルクソンの創造は無からの創造ではないし、旧要素の機械的な再配列ではない。矛盾してはいるが、革新的連続化、もしくは創造的進化であり、たえず発明的な内在、無数の先在からなる充滿のさなかでいつも始まりつつある即興なのである」⁽¹⁾。

創造が無からの創造と解される限り、ジャンケレヴィッチの言うように、ベルクソンの創造の概念は矛盾する。創造とは究極的には宇宙開闢を、存在の創建を、ある絶対的な開始を想起させるものだろう。だからこそ創造は驚異であり神秘であった。しかしこのような創造の観念は無のイマージュに取り憑かれているのだとベルクソンは言う。

1 無からの創造には、存在は無の征服であるという想念が働いている⁽²⁾。存在とは、その裏側に何も無い状態を暗黙の内に前提していて、何かがあるということにはすでに無の超克が込められているというのだ。無からの創

造は存在を巡るこうした事情を伴っている。

存在とは変化であり成熟であり創造である (500)。ベルクソンのこの考えに立てば、創造は無からのという発想から離れてむしろ生成と一致する。このことを矛盾なく理解するためには、すなわち創造を生成として理解するためには、創造から無の観念のウェールを剥がさねばならない。

無 *neant* というのは、虚偽であるというのがベルクソンの主張だ。無の観念を空虚 *vide* と考えるなら、空虚とは全く充実した表象にほかならない。

例えば魚には、というのは記憶力が微弱で、経験に沿って流れ行くままに生を送るものには、空虚はなく無はなく否定もない (743)。彼らは次々と起こり行く状態を知覚しつづけ、絶えず現在の中に生きる。存在の連続的な溢をしか知らぬだろう。空虚というものが成立するのは、「過去から現在へ後ろから前へと流れ行く実在に対して背を向ける」ことによってである (743)。それには充溢する現在から身を引き離して、不在の対象を投影する知的な能力が求められる。

空虚は、あるイマージュを予想あるいは期待しているところに、それに反して現前したものについて表明される裏切られた感情に起因する。散文を前にして人は言う、「これは詩ではない」。この感情は現前しているものを離れて、先立つ状態に固執することに成立するものだ。空虚はこの感情に動かされて、現前している対象をありうるものと置き換えることで、はじめて表象される。つまり実際にはいつも何かが現前しているのである。

非存在 *inexistant* というのも、ある対象についてその存在を認めたその上で、その対象が存在しないとすることによって構成される。だから、ある対象の非存在の観念は、同じ対象の存在するという観念よりも一つ多いものを

含んでいることになる。

では絶対無 *neant absolu* はどうか。右のようにある対象とある対象とを置換していても無には到達できない。そこである対象について、それ自身を消去して、その後に残る空白によってその対象を置換することにする。ついでこの操作を、すべての対象に当てはめていく。こうすれば絶対無の観念に行き着くことになるだろう。しかしこの観念にはすでに全体という観念が前提されている。そればかりかその全体の上さらに一つ知的な操作が加えられているだろう。だから絶対無の観念は全体の観念よりも一つ余計に充実していることになる。

結局ベルクソンにとつて、かえって存在を覆おうとするのが無の観念ないしイマジユである。無とは存在しているものの上に映された無いこともあり得るといふ表象であり、無それ自体というのは偽の観念にすぎない。別のところから推察されることだが、この無の観念は、持続とともに存立する可能的なものの一つの名であるだろう。⁽³⁾ こうしてベルクソンは存在を無との結託において捕らえるのではなく、存在は変化であり持続であり創造であるという認識をその哲学の根幹に据える。

はじまり

無の観念の批判とともに、ではベルクソンは充溢からの創造を思考したのかと考えると論点がずれてしまう。彼の主張は、無ではなくて存在の充溢がまずあった、創造はそこからはじまった、ということではない。むしろ何かがあるということ、創造が続けられているということから考えようとするのである。そして続いているということと創造の観念とが結びつく時、問題含みになるのは創造におけるはじまりの観念である。無への批判の本質は、

創造を開始の時間性とともに想起することを再検討に付すことにある。創造の観念は開始の時間性からいったん切り離されねばならない。⁽⁴⁾

持続とは出発点から到達点への間として想起されることを拒否するようなイデーであった。持続はつねに過程であり、過程であることこそが実在であるような連続性である。それは移行そのもの、いわば間それ自体である。こうした持続が創造の概念と本質的な関係に入ること、はじまりの観念は創造の第一義的な意味を占めなくなる。

絶対的な開始とは、無の表象を運動以前の完全な停止として伴うことでその絶対性を確保するものだろう。しかしベルクソンにとってこうした停止はイマージュとしてしか存立し得ない。⁽⁵⁾

はじまりとしての創造に代わって提示されるのは、過程であり続けることが本質であるような創造である。すなわち持続することが創造であり、また創造であることによってはじめて持続が可能であるような、創造と持続の概念である。

『進化』におけるベルクソニズムの基本的な構図は、創造と持続と進化の三幅対にある。進化論を真ん中にして創造と持続の概念が両脇を固める。しかしこの三つにはそれぞれを繋ぐ思考の隠れた起点があつて、それが芸術における行為論になつている。

この著作で創造と持続の概念は自らの内容を表現するのに互いに他を必要とし、一種の「相互浸透」的状态に入る。ベルクソンは芸術における行為を参照することで、創造と持続の相互に補完しあう概念的絡み合いを展開しようとする。形、素材、新しさ、成熟、時間などについての基礎的なアイデアがそこから取り出され、創造と持続の概念の両翼がひろげられていく。そしてこれら概念に託された思考が、生命進化論を焦点として結実することにな

る。実際、芸術と生命進化とはいずれもベルクソン創造論の起点であり終点である。ベルクソンにとって創造 creation は、新たな種を生み出しつつ続いていく生命の進化 evolution であり、また芸術に代表される新しい形態の産出としての人間的な創造 invention である。いずれにしても創造とはここで生成における新しさの登場である。芸術は創造と持続の相互浸透を経験のレヴェルで開示し、生命進化論はそれを「実証的」に表面化する。

新しさの内的論理

では創造が新しさの産出であればベルクソンはそれをどの点に見ていたか。まず意識における自己による自己の創造 *creation de soi par soi* が認められる。「物質と記憶」とともに過去の即自的残存を認めるならば、意識が同じ状態を経験することは決してない。あらゆる瞬間に経験のすべてが保存されるのであれば、たとえ世界が何一つ変わらなくても、私は常に新しい。そして自分が変わることによって世界もまた絶えず新たなものと映るだろう。この自己による自己の創造は、『進化』では人格ないし意志の全体的かつ根底的な増幅である成熟として改めて示される。「人格は絶えず発達し、成長し、成熟する。その各瞬間は以前からあったものに付け加わる新しいものである」(499)。ここで新しさとは、同じ状態が決して繰り返されないことを意味する。

ベルクソンは物質を絶えず繰り返す現在と定義する。物質では作用に対する反作用はつねに等しく、いつも同じ反応が繰り返される。この反応の同一性は計算を許容し、ある物質系の未来における出来事は予測されることを許すだろう。つまり物質の未来は原理的に予見可能なものである。しかし、意識の状態の一つ一つは予見不可能 *imprevisible* であり、過去がすべて記憶として保存されるから意識が同じ状態を繰り返すことはない。「意識におい

ては過去が現在に切迫し、そこから一つの新しい形態を湧出 *jallir une forme nouvelle* をせる。この新しさは、それに先行するものと同じ尺度では測れない」(517)。過去における様々な心理状態のすべてを数え上げ、あらゆる要素を考慮しても、来るべき意識の状態は予見されない。意識は絶えず新しくなっていく。

持続的な創造

先立つ二著作に比して『進化』がすぐれて創造の言説であるのは、新しいということについて、予見不可能性という規定に留まらず、さらにその内的論理を提示しようとした点にある。意識あるいは記憶を基盤にしていた考察が今度は生命論を舞台にすることで、新しさ産出の論理の内実を具体的に展開するのである。

「新しい種の発生について真であることは新しい個体の発生についても真であり、さらに一般的に、生命体のいかなる形態のいかなる瞬間にも真である。変異が新しい種を生み出すには、一定の重要性和一般性に達してからでなければならぬが、変異は個々の生命体の中であらゆる瞬間に、それと気づかれぬうちに発生し続けている。近頃よく聞く突然変異も孵化の仕事が、というよりもむしろ成熟 *maturation* の仕事で、変化していないように見えた一連の世代に渡って果たされていないければ、明らかに不可能である。この意味で生命も意識の場合と同様に絶えず何ものかを創造していると言える」(518)。

成熟とは新しいものが世界に加算的に付け加わっていくことではない。それは経験が記憶ないし過去へと参入することで、既にあつた全体が包括的に改変されることである。記憶に何かが付加されると、その付け加えは全体のあらゆる部分に反響し浸透していつて、全体は根底から変わっていく。成熟というのはなによりもこうした全体的

な刷新である。そしてこの絶えざる成熟が創造だと言うのである。

時間がかかる

こうした成熟の中で時間は具体的に自らを頭わにするだろう。創造には時間がかかる。この時間を必要とするということにベルクソンの創造の本質がある。創造は持続を成熟の時間として必然的に要求するのである。成熟として創造は時間と一つである。そしてこのことがあからさまになるのが何か新しいものを生み出そうという時であり、その時必要とされた時間として持続は現実的に露呈する。

「魂の底からイマージュを引き出してこれを創造する芸術家にとっては、時間はもはやお飾りではない。それは内容を変えることなく長くしたり短くしたりできるような一つの間隔ではない。彼の仕事の持続は彼の仕事の欠くべからざる integrant 部分を為している。この持続を収縮あるいは膨張させるならば、持続を満たす心理的な進化 evolution psychologique を変化させると同時に、持続を区切る創作 invention を変化させることになるだろう。創作の時間はここで創作そのものと一つでしかない。それは思考が物になっていくにつれて変化していく一つの思考の進展である。要するにそれは生の過程であり、何か觀念の成熟のようなものである」(783)。

何かを作り出そうとして費やされる時間があり、その創作が続く間、作り手の思考の変化の連続がある。ここで計量的な時間の経過は、考えを物するのにかかる時間とピツタリ重なるだろうか。いずれにしろ計量的な時間の幅が後に残った作品の程度を示す指標になるわけではない。瞬間的に仕上がるものもあれば、実現に三〇年の時を必要とするものもあるだろう。ここでいわれている時間とは、創意を形にしていくことと同期して、変化を続けてい

る思考の過程である。それは行為の時間の質であり、全体的な生まれ変わりの連続であるだろう。成熟とはこうした時間のことである。そしてこの持続が、残される作品には明白な仕方ではないにせよ書き込まれているということだ。新しい形態への突破は表面には現れない思考の持続を伴い、この経験のなかで持続はもつとも生々しい。⁽⁶⁾

ところでこの成熟とともに創造には飛躍の契機がある。同じステップを繰り返し繰り返し練習してある時、私たちは同じことの反復から脱出する飛躍の瞬間を迎える。無意味なままに覚え込まれていた腕の運び、足の屈曲の一つ一つはそのとき新たな発見で満たされていく。振り付けをなぞることがそのまま新しい動きの発明であるような瞬間。この成熟の爆発とともに新しい次元の経験がはじまっていく。部分には全体が顕現し、私たちは予測もしなかった新しい自分へと突破する。こうした飛躍の契機をベルクソンははずみ (élan) と呼んだ。

創造の持続

成熟としての全体的な更新を持続的な創造としよう。持続的なというのはまずベルクソニズムの発現の順序にあわせた理解である。内容としては、持続の発見とその概念的展開の中で辿り着いた創造という相面に留意した。自己による自己の創造という『進化』第一章で提出される理解は、基本的に前二著からの持続概念の継続とその生命論への橋渡しを行うものである。

『物質と記憶』で提示された過去の即自的残存は、『進化』では人格ないし意志に受け継がれる (190)。純粹持続、深い自我、あるいは潜在的な記憶として提示されてきた持続が、『進化』では人格のさらには意志の増幅的刷新として再発見される。記憶、人格、意志という全体性は根底から変動し続けている。表面としては知覚可能でない深み

における持続としての創造。ベルクソンの創造は絶対的な創造ではない、それはラディカルな創造だ、とポランは指摘しているがそれは私たちにとって成熟という持続的な創造として理解される。⁽⁷⁾

対して『進化』において新たに発見された新しき生成の理念がある。それが生命進化の検討にともなって把握されたはずみのイマージュである。⁽⁸⁾この概念は創造を新しきをもたらし運動の相において説明する決定的なロジックとなる。

意識の諸状態はそれぞれ絶対的に異なる。この異なる状態がしかし相互に浸透しあつて連続を形づくっている。『試論』において示された持続とはこのようなものであった。『進化』ではこの状態と状態との差異について、新しい状態が生み出されることで異なるようになった、と考えるようになる。異質性は、飛躍によつて連続に齎されるようになるのである。つまり生成の飛躍によつて生み出された新しきとして、状態と状態の間の絶対的な異質性は理解されるのだ。はずみとはこうして異質性を可能にする運動の動きであり、この動きによつてはじめて異質な諸状態の相互浸透的連続は可能になる。はずみによつて変異が生じることで生命は存続を繋いでいき、この生命の連続がまたはずみを次の世代へと伝えていく⁽⁹⁾。ここで創造におけるこの飛躍の局面を創造の持続と呼んでおく。

はずみのイマージュ

ベルクソンの進化論は、生命が物質的な抵抗に出会いつつ、その障碍を起点として新たな種を分化によつて生み出していくものとして語られる。ベルクソンはこの分裂あるいは分化を進化運動の本質としている。「胚の発達を一目でも見れば生は全く別様であることを機械論は見せつけられただろう。生命は要素の結合や累加によるのではな

く、分離と分裂によって事にあたるのだ」(571)。

この分裂の運動はある目的に導かれるが、ここで目的とは実現すべき計画を意味するものではない(582)。ベルクソンにとって生命進化における目的は、目指すべき調和として進化が進むその先に設定されるようなものではない。「一つの計画とはある仕事に割りふられた一つの終点である。それは未来の形を描きながら未来を閉じる。反して生命進化の前方には、未来の扉が開け放たれたままになっている。それは最初の運動 *mouvement initial* によって終わりなく続けられる創造である」(584)。ここで目的とは到達すべき終末ではない。むしろ完全な調和があるとすれば、生命が進む方向の背後にであるだろう。「生命の統一が時間の道沿いに生命を駆り立てるはずみのなかに全的に存しているならば、調和は前方にはなく、後方にある。統一は背後の力 *vis a tergo* から来る」(583)。調和、統一、計画、そして目的とはポテンシャルとしてのみ認められるものである。ベルクソンの生命進化とはこのような目的が現実化とともに障碍に沿って分裂し、拡散することで生命種を存立させていくものだ。いわば目的の炸裂、調和の爆発として新たな種、新たな形は出現するのである。そしてこの分裂を動かす運動の本質が背後としての起源のはずみ *elan originel* として取り出されるのだ。それは「諸変異の深い原因である。すくなくとも規則的に遺伝し累積し新しい種を創造する変異の、深い原因である」(570)。

ところで前へという進化の傾きの表現は、一つの方向を向いたその先をいうのではない。それは、爆発によって、可能的に切り開かれる方向の多様性そのものことであるだろう。

持続的な創造、創造の持続

新しさの生成とともに全体が生まれ変わっていくことを持続的な創造とし、はずみによる新しさの生成そのものを創造の持続とした。前者は持続の連続性に、後者は創造の飛躍にアクセントをおいて、それぞれ創造と持続の概念の相互浸透を示している。こうして区別はしたがしかし両者は別のものではない。

「私たちの生の各瞬間は一種の創造である。画家の才能は、彼が産出する作品の影響そのもので形成され、変型され、ともかく変容する。それと同様に、私たちの状態の各々は、私たちから発出すると同時に、私たちがいま自らに与えた新しい形であるからこそ、私たちの人格を変容する」(500)。

創出された新しさが蓄積されることで思考は絶えず生まれ変わる。全体的な変革。作品はこの全体からみればその表面から剝離した一切片に過ぎない。ただ、このわずかなひとかけらを絶対に新しいものにするには、力の及ぶかぎりあらゆる記憶を圧縮し、ある緊張の度合いに達していなければならぬ。その集中の中で、はずみを自らの運動とするとき、この切片は真に新たな形態を持つことになる。飛躍の契機。こうして自ら生み出したものによつて刺激され創意はまた変化のただなかに投げ込まれる。子供が生まれるということは、産んだ本人が全体的に生まれ変わっていくことでもあるだろう。

運動の運動

ではこのような結構を持つベルクソンの創造において起源 *origine, source* とは何か。起源のはずみ *élan ori-*

binel とはどのように機能して起源であるのか。

創造は持続していることを本質とする。この概念の中で起源というのは絶対的な開始を意味するものではなく、はずみが生命の秩序として存在の充溢に与えられること、またそれによる生命進化の開始、起源とはこういうことではない。

起源とは運動の運動である。はずみはあらゆる運動に共通する動きの形式として起源である。持続とは過程としての実在であり、どこからどこへではなくて、移行それ自体であった。運動というものがこのように理解される時、その起源は運動の開始にまつわる事柄ではない。運動のその動きの本質が、起源と呼ばれるのである。ベルクソンは神について次のように語っている。

「一つの中心があつて、そこから諸々の世界が無限に続く花火の火箭のように湧出する。ただし私はこの中心をもつ chose ではなく、湧出の連続性 *continuité de jaillissement* とする。神はこうして定義してみると創られた何ものも所有することはなく、絶えることなき生であり、行動であり、自由である。創造もこのように考えるならば神秘ではない。私たちは自由に行動するやいなや自らの内に創造を体験する」(706)。

この世界を与えたもの、この宇宙を創造したものを神と呼ぶのではない。神は製作者ではないし、運動を最初に与えたことによつてそう呼ばれるのでもない。それは私たちの経験的な創造と動きの本性を同じくする運動である。そしてこの動きの本性が湧出の連続性と言われているのだ。恐らく、この概念は連続性であることにおいて、すなわち絶えず続いていることで、湧出として存立するだろう。この湧出のリズムがはずみである。⁽⁹⁾

起源と獨創性

はずみの中で起源と獨創性が出会っていて、この媒体が新しき出現の内的論理となる。「芸術家の引く獨創的な線 lignes originales はそれら自身すでに一つの運動の定着でありいわばその凝結ではないか」(98)。ある画家が予め画布の前に立っていて線を引いているのではない。線を叩き付け一挙に引く動きがあって、この動きの起源ないし根源性はその線を引いた者がある画家へと生成し、また残された線を獨創的なものにしていく。そのためには、私たちは緊張の及ぶ限り過去を圧縮⁽¹⁰⁾し、起源であるはずみを自らの意志に臨在させていなければならぬ。こうした生の特權的な瞬間において、「私たちの各状態は、獨創的な歴史における獨創的な一つの瞬間」(49)となるだろう。起源と獨創性とがはずみによって媒介される。創造的進化は、究極的にははずみの根源性によって獨創的なものすなわち既在のいかなるものとも異なるものがある新しさとして実現していくだろう。

起源とは運動の運動を意味するものであり、私たちは創造的な行為の中でそれをはずみとして経験している。グイエの強調するようにベルクソンの創造は経験の事実であって神秘ではない⁽¹¹⁾。それは私たち一人一人の生の中で発露する持続の最も現実的な姿である。

行きつつ行く

13
ベルクソンの創造における起源がその存在を、それが存在する通りの仕方⁽¹²⁾で打ち明けるのが、私たちの創造の行為である。私たちが行為のさなか、自らの意志に湧出の運動と同じ方向性を体現するとき、起源は起源として自ら

「自由な行動において、私たちの存在の全てを凝縮し前方へ投げ出そうとする時、私たちは動機や動力を程度の差はあれ明晰に意識する」(697)。動機や動力とは運動を動かしているものであり意志とも呼ばれる。意志とは過去の全体を圧縮し現在へと集中していく時に感じられる一つの力である。それは行為において私たちをその運動へと駆り立てている何かだ。

はずみは、この意志を個別的な生命における自らの場所とする。「私たちが自らの存在を意志の中へ置き直し、意志そのものをもとの衝動の中に置く時、実在が一つの永続的な成長であり、終わりなく続く創造であることを理解し感じる。私たちの意志はすでにこのような奇蹟を行っている」(698)。意志は私たちの創造の行為の起源として、また終わりなく増幅していく根底的な全体性としてベルクソンによって理解されている(496)。創造と持続の二つの相は私たちの行為の中ではこうして意志に見いだされる。この場合の運動の運動とは意志であり、またこの意志があらゆる変化の痕跡を留め、絶えず生まれ変わる全体である。それは私たちの行為が個別的な対象に向かっている限り、全体として把握されることはないが、行為の中に全的に顕現しているだろう。⁽¹²⁾

ベルクソンははずみについてそれを背後に感じられる(492)、あるいは背後の力(683)と述べている。そこには起源をレトロスペクティブに見出すのとは別の把握の形式が示されている。この背後ということは文字どおり背後であるだろう。背後とは意志が、意識の集中の向かっている対象としてではなく、その集中に働いている力として感じられることの表現である。それは運動の動きそのものは行為の中で不可視であり、潜在的であることを示唆している。回顧的展望にもとづくならば、意志ははじまりの観念と混同されて、やがて絶対的開始とはずみとは同一

視されることになるだろう。行為の中で背後として感じることに、これが起源というものをその実在に即して、最も現実的に把握する仕方である。

だからはずみが生起源として適切にかつ具体的に与えられるのは行きつつある時でしかない。人格、意志、記憶、生命、意識、自由、そして創造。こうした名で様々に呼ばれる起源は、私たちが現実的世界の中で未来へ行きつつある時に、自らの存在を創造の要求 *exigence de création* (708) すなわち「行く」ということとして、独特の仕方です。 *genesis* 教えることになる。⁽¹³⁾

「私たちの人格それ自身の暴力的な収縮によって、私たちはすり抜けていく過去を取り集め、緊密に不可分なままに現在へ押し入れなければならない。こうして過去を現在へと導き入れることで、現在には創造される」(664)。現在を創造する時、すなわち未来へ行くこうとする時にこそ、この運動へ自らを駆り立てている当のものが、行きつつある方向の背後に、ぼんやりとはあるが確かに知られるだろう。

ここから先、ベルクソンの区分に従えば、個別的な行為の起源としての意志から全体の起源へと赴くのが哲学の仕事であり、個別的対象に集中して創造を続行することが芸術の本領である。こうして哲学者には全体としての創造的進歩が現前することになる。「各部分の運動を続行させているのは、依然として全体に渡る原初のはずみ *élan primitif* なのである」(540)。

はじまりの遍在

ベルクソンの創造にはじまりの観念を妥当な形で求めようとするなら、そのポジションは無からの創造とはまっ

たく異なるものになる。新しさを生み出す運動の起源は個別的な創造の体験のなかで意志として発見される。意志の、この運動の運動の、動きの形式がはずみであった。はずみは新たな個体新たな種の発現するいたるところに働いていて、すべての進化運動に共通するリズムとして潜んでいる。創造は、生命の存続しているあらゆる場所ではじめられるのを待っているのだ。

ベルクソンは知性は創造を取り逃がすと言うが(634)、これを知性の仕方では理解される創造もあるととるなら、無からの創造という觀念の発生は理解できるだろう。起源のレトロスペクティブな把握に基づいて、私たちは存在の絶対的な開始として無からの創造を表象するだろうし、あるいは因果の系列として事象をたどり、第一原因に創造を見い出すことにもなる。⁽¹⁴⁾

創造の持続においてはじまりは遍在する。そして一度こうして擱んでしまえば、このはじまりの一つが持続の開始として表象されていたとしても、そう構うことはない。⁽¹⁵⁾

注

- (1) Vladimir Jankelevitch, *Henri Bergson*, PUF, 1959, p. 215 引用は邦訳のもの。V.ジャンケレヴィッチ、阿部一智・桑田禮彰訳、「アンリ・ベルクソン」新評論 1989 p. 292
- (2) ベルクソンのテキストからの引用はすべて生誕百年記念版著作集のページを記す。HENRI BERGSON, *ŒUVRES*, PUF, 1959 など *Maître et mémoire* は MM, *L'évolution créatrice* は EUC, 「意識に直接与えられたものについての試論」は「試論」, 「創造的進化」は「進化」と、それぞれ略記した。
- (3) 存在と無を巡るベルクソンの考察は、持続をさらに徹底して創造の運動の側面から理解することで、やがて現実的なものと可能的なものとの表裏一体のあり方へと収斂するはずだ。可能なものの存在論を私は別のところで展開

した。平光哲朗「実現は偽の概念ではない。」in「フランス哲学・思想研究」第一〇号、日仏哲学会、2005、pp 132-143

(4) 無からの創造の拒否を充盈からの創造と捉えることはひとまず措く。これを扱うには、イマージュについてのヘルクソンニズムの体系的な思考とともに、潜在性について考えあわせなければならぬ。

(5) MM, chap. 4、とりわけ perception et matiereを見よ。

(6) しかし純粹な創造というものも考えうる。時間が、少なくとも私たちの経験しているようには持続しない宇宙を、ヘルクソンは思い浮かべている。私たちは砂糖が溶けるのを待たねばならないが、それはこの宇宙においてのことである。

(7) RAYMOND POLIN, Bergson, philosophe de la création, LES ÉTUDES BERGSONNIENNES Vol. V, PUF, 1960, p 202 ポリンは「試論」での行為における自由の議論を創造論の発端として、「進化」の自己による自己の創造へとむかう流れの中に纏めている。

(8) はずみがイマージュであることについては EC, p 713を見よ。

(9) ヘルクソンはここで、この連続的な湧出のひとつが私たちの宇宙の生成を貫くはずみとして物質化し、この生命進化の起源となったと考えているようである。

(10) ヘルクソンは圧縮と収縮を部分から全体へ進む行き方である制作の特徴とし、爆発ないし暴発を全体から部分へと進む有機化の特徴として区別している。金子智太郎「ヘルクソンにおける創造と製作」『『美學』第五五巻第一号、美学会、2004、pp 1-13はヘルクソンにおける創造 création と製作 fabrication の区別を芸術制作論から扱っている。

(11) 「ヘルクソンニズムの全体は創造の行為を経験の明白な事実として考え、そこから神秘を剥ぎ取るためのひとつの努力として現れる」。HENRI GOUIER, BERGSON ET LE CHRIST DES ÉVANGILES, VRIN, 1962, p 86

(12) 「私たちの過去の精神的な生は、全体として、私たちの現在の状態を必然的に決定することなく条件づける。過去の諸状態はいずれも性格の中に明白には現れないが、過去の精神的な生はまた、私たちの性格の中に全的に顕現す

る」(MM289)。

(13) MM, chap. 3, pp 276-277 を見よ。あるいは「イマーシェンするとは思ふたすことではない」(MM278)。

(14) グイエ、前掲、pp 85-88 を参照。

(15) 「ある瞬間に、空間のいくつかの点で、はっきりそれとわかる一つの流れがはじまった。この生命の流れは、物体を通り抜けてそれらを次々に有機化していき、世代から世代へと移りながら様々な種へと分裂し、様々な個体へと散らばったが、その力は全く失われることなく、かえって前進するにつれて強まっていった」(516)。

(大学院博士課程学生)

SUMMARY

La durée de la création: Il y a partout des commencements.

Tetsuro HIRAMITSU

La création bergsonienne n'est pas une création *ex nihilo*. Bergson sépare la notion de création d'avec l'image du néant. À la place, cette notion s'unit étroitement à celle de durée. Dans *L'Évolution créatrice*, ces deux notions, de création et de durée, se pénètrent, se complètent et se continuent en quelque sort l'une l'autre.

D'une part, la durée en tant que mémoire, personnalité et volonté, est la création de soi par soi. Car le passé se conserve de lui-même à tout instant, de sorte que nous grandissons, mûrissons et nous renouvelons sans cesse dans l'ensemble en avançant. D'autre part, dans l'évolution créatrice de la vie, il y a le moment du saut, qui produit une nouvelle espèce, un nouvel individu ou une nouvelle forme. Le saut introduit dans la durée la nouveauté absolue, qui est une chose toute différente de celles préexistantes jusque là, et il nous permet ainsi de progresser.

Avec ces conceptions complémentaires de durée et de création, l'idée d'origine se modifie radicalement. Elle ne signifie plus le commencement absolu, mais l'essence du mouvement, la mobilité même. C'est un rythme commun à tous les mouvements vitaux. Bergson l'appelle l'élan originel.

Lorsque nous incarnons le rythme de l'élan dans notre acte libre, nous pouvons faire jaillir une forme nouvelle, c'est-à-dire, une forme originale. Et c'est à ce moment-là que l'élan manifeste son originalité comme une continuité de jaillissement dans notre volonté.

En regardant la création comme la durée de la création, on trouve qu'il y a partout des commencements.

キーワード：ベルクソン，創造，持続，無からの創造，生のはずみ